
銀彩

東雲咲夜

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀彩

【Nコード】

N0912E

【作者名】

東雲咲夜

【あらすじ】

私は、あなたが欲しいの。だから私にあなたを頂戴。

とても、月が綺麗な夜だった。

空が綺麗に澄んでいて、ぽっかり満月が浮かんでいた。

ときおり吹く風は爽やかで火照った体には心地よい。

長いスカートがふわりと揺れる。

私の目の前には、大きな木に縋りつくようにして震えている男が一人。

愛しい愛しい私の大切な人。

でも、どうしてそんなに震えているの？ 脅えているの？

私は、あなたを私のモノにしに来ただけなのに。

何も怖がることなんてないのよ。

「ねえ、どうしてそんなに震えているの？」

尋ねてみても何も答えてはくれない。

ちらちらと、私の右手にある物を見るばかり。

「ああ……ごめんなさい。これが怖かったの？ 言ってくれなきゃわからないよ」

私が握り締めている、新品のナイフ。

いざというときに切れないと困るから、わざわざ用意したのだ。

いきなりナイフを見せるのはよくなかったのかもしれないわ。

そんなにナイフって、怖いかしら？ 逃げ出すくらいに？

私は学校の入り口に呼び出したのに。

あなたたったら、私とナイフを見るなり走り出しちゃうんだから。

あんなに早く走れるなんて、私知らなかった。

どこに行くのかと慌てて追いかけたのだけど、すぐに見失ってしまっただの。

早く見つけないと、って必死だったのよ。でもね。

うるうるしてたら、公園の大きな木にくっついてたのよ。

とってもびっくりしたわ。

抱き枕じゃないんだから、そんなものにくつつかないで。
私を抱きしめてよ。

見つけたと思ったのに、さっきから何も話してくれないの。
ガタガタ震えているばかり。

触ろうとしたら、手を振り払われてしまったわ。ひどいよ。

私はただ、あなたと一緒にいたいだけなのに。

どうして理解ってくれないのかしら。

ああ　もう我慢できない。

私は震えている愛しい人に近づく。

「ねえ、あなたを私に頂戴？」

私がそれを見たのは、冬休みの頃だった。

そのときには、あなたはもう私のことを見ていなかったのかもしれないわね。

遊びに行こうと誘っても、バイトが、用事があるから。

いつもその一点張りだったわ。

私はとつても退屈していたのよ。

たまに遊べたかと思えば、頻繁に携帯をチェックしているし。

街で知らない女の子と二人っきりの姿も見かけた。

あなたは……知らないでしょう？　私が後をつけていたなんて。

鈍感だものね。

そんなところも愛しいけれど。

それっきりなのかなって思ったのに。

あなたは何回も何回も、女の子達と遊んでた。

私をほったらかしにして。

私の前では笑ってもくれなくなっていたのに。

女の子達の前では、ニコニコ笑顔。

どうしてその微笑を私に向けてくれないの？

余所見しないでいて。
私のことだけ見ていて。

他の女の子なんか。

私の事だけ見ていて欲しいの。

あなたは誰にでも親切で、丁寧で、優しい人。
でも、私が欲しいのはそんなあなたじゃないの。

皆に見せているあなたじゃないのよ。

そんな振りまいているものはいらないの。

私は、ワタシだけのアナタが欲しいの。

それ以外なんて、必要ない。

私はあなたのことをこんなにも想ってるの。

余所見なんてせず、一途にひたすら想っているの。

あなたは私をどうして見てくれないの？

どうして私を愛してくれないの？

わからないよ。

でもね、これだけはわかったの。

あなたが私を見てくれないのなら、私のモノにしてしまえばいいのよね。

無理やり振り向かせればいい。

手段なんて、問わない。

どんなことだって厭わない。

あなたが私を見てくるのならば。

腕ずくでも奪い取ればいいのよね。

私は、あなたに全部あげる。

カラダだって、ココロだって、何だってあげるわ。欲しいものは全部捧げる。

だから、あなたを私に頂戴。

私はあなたが欲しいの。

深夜の公園に響く、濡れた音。

濃厚な甘い香りが、私の脳を犯してゆく。

私は愛しいあなたにナイフを突き刺す。

深く深く、何度も繰り返す。

瞳が虚ろに見開かれて、震えが止まっても。

私を見つめたまま、動かない瞳。

やっと私を見てくれたわね。

赤い赤いあなた。

とっても綺麗なあなた。

私だけの、あなた。

私の血は黒ずんでいるけど、あなたの血はとっても鮮やかな赤色。

熟した柘榴みたい。

きつと舐めたら、綿菓子のように甘いのでしょうね。

血まみれのあなたを抱きしめながら、狂喜に浸る。

これであなたは私のもの。

私だけのあなた。

そして私はあなただけのもの。

私はあなたがいないと生きていけないの。

あなたもそうでしょう？

手に入らないのならば、奪い取ってしまえばいいのよ。

手に入るのを待っているなんて、そんなことできないわ。

ずっつと一緒。

これで二人はずっつと一緒にいられる。誰にも邪魔されずに甘い時間を過ごせるのよ。

あなたは私のモノなんだから。

ねえ、二人きりになれたんだから、どこかへ遊びに行きましょう？

何処か遠い所。人のいないところがいいな。

この街は、人が多すぎるもの。

そしたら、二人で暖まりましょう。

あなた、とっても冷たいもの。

愛しい人を抱きしめながら、ぼんやりと考える。

狂喜はさり、正常な思考が戻ってくる。

繰り返される自問自答。

私は……間違っていたのかしら？

そんなはずないわ、これでいいのよ。

そうよね。私は正しい。でも　それなら何故動かないの？

当たり前でしょう。自分のモノにするっていうのは、そういうことなんだから。

わかってるわ……理解っているけれど。

これからは、私が面倒を見てあげるのよ。動けないのだから。

そうしたら、また笑ってくれるかしら。

二度と笑わない。それは解っているでしょう？

私の中に、笑顔は残っているのだから、それで十分よ。

……どうしてかしら、胸がさつきから痛い。

それは気のせいよ。だって、欲しいものは手に入れたでしょう。

私が本当に欲しいものってなんだったのかな？

今更そんなことを言っただうするの。

もう　戻れないのよ。

見上げる夜空に浮かぶのは、白銀の月。

力の抜けた手で握るのは、赤に濡れた銀色ナイフ。

後悔に零れた一滴。

愛しい愛しいあなたを彩る　銀彩。

（後書き）

月って、色んな色に見えませんか？

赤色、青色、銀色、黄色。

どれも同じ月に変わりは無いのに見える角度で違う。
不思議ですよ。

サクサクッと読めたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0912e/>

銀彩

2010年10月8日15時41分発行